

故郷随想録 平成二十二年八月一日
松本の文化村 たなか踏基

随想録執筆は何と一年半振りである。

最近松本澤村に転居した友人からの電話あり。「踏基さんが昔住んでいた辺りや井口明子の家があった辺りも更地になっている。久保田画伯が高校時代に下宿していた百瀬さんの家も見つかり喜んで訪問していた。下宿屋の主人も久保田さんはどうしているかと噂していたという」

友人の何気ない「更地」という言葉で、忘れていたほろ苦い私の青春の思い出が、忽然と消失した寂しさを感じ、一日憂鬱だった。

友人とは、私が信州を訪れる時は何時も、自動車運転し取材で手伝ってくれる高橋昭一君と井口明子とは故熊井啓監督夫人、エッセイストとしても日本のポプリの第一人者として著名な明子女史、高校同期でもある彼女は、松本の通称文化村に住み隣人でもあった。画伯とは、独自のライブ肖像パフォーマンスでエブソン社から大きな賞を最近受賞の久保田喜正。久保田君は病癒えて復学後、高校の部活で明子女史と同じ美術倶楽部(アカシヤ会)に籍を置いた縁で、二人とも女史の洋館を訪問したことがあった。

自宅から松本測候所の建物が見通せた。当時澤村に下宿をしていた久保田君は、西町の私の家にしばしば遊びに来た。高校時代久保田君は二年間、私は一年間病気休学し、同じ休学者同士は身の不運を慰め合い無聊を慰め合った。

当時界限が何故文化村と呼ばれていたのかを良く理解していなかった。近隣に医師・大学教授、画家・詩人・作家や左翼思想家等が住み松本の文化人を自称する人々が住んでいるからだという漠然たる認識があった。最近ネット検索で見つけた○○○○文章中、何故文化村と称し

たかを知ることができた。御茶ノ水の文化学院創設者で、自由主義思想の啓蒙家西村伊作氏が設計した数軒の洋館があったからだと合点した。

西村伊作は、明治17年(一八八四)は和歌山の新宮生まれ、大正モダンを実践した寵児。父は旧約聖書「イサク」から命名したという。与謝野寛・晶子の協力を得た文化学院の開校を初め、石井柏亭らと絵画・陶芸に親しみ、家族中心主義の「居間式住宅」で新風を巻き起こした男。

以下、(柚)さんのGoogle「発見!お気に入り日記」中から Yunan さんの文章を転載する非礼をお許し戴きたい。(2008.12.20)

《サンタカン八番娼館》は本を買って夢中で読んだのですが映画は観なかったと思います。熊井啓監督だったのですね。というのは熊井監督の奥様の熊井明子さんの大ファンでエッセイ集を大切に持っています。熊井明子さんのエッセイ集は今から30年以上前に生活の絵本社から発行された本で、雑誌「私の部屋」に連載されていたエッセイをまとめたもので「私の部屋のポプリ」という題名です。明子さんは松本郊外の「文化村」(御茶ノ水の文化学院創設者の西村伊作氏が設計、七軒の家があった)の教育者の家に生まれた方です。後の文化学院の院長石田アヤさんはこの文化村の生まれです。明子さんの曾祖父とお父様な開智小学校で教壇に立っていたそうです。熊井監督とは10歳違い安曇野生まれの啓監督との出会いは私もよく判りませんが、松本の深志高校の先輩後輩にあたるようです。(略)お二人が「鯛萬」でデートした時の話を読んで「鯛萬」に憧れました。「鯛萬」のワインゼリー 浅間ベリーのアイスクリームの話も出ていました。こじんまりとした「鯛萬」が懐かしいと書いてありました。昨年の五月熊井監督の訃報と聞いた時、明子さんの悲しみを思い泣きました。(略)私が知りたいのは「文化村」が今でもあるのかという事なのですが、」

ブログを読んで、自宅から路地を左折した辺りの木々の中に二階から三階立ての洋館が数軒あったのを私は思い出した。「鯛萬」は松本で知る人ぞ知る高級フランス料理のレストラン。

二人が結ばれた経緯は「私の信州物語岩波現代文庫熊井啓著」に記述されていると教えてくれたのは、今だから話せると高校時代の担任伴野敬一先生で、浅間温泉の玉之湯で行われた先生の喜寿の祝いの席上。偶々同窓生の噂話を酒の肴にした折に井口明子のごが姐上に上がった。

我家は確かに文化村の一番外れに存在してはいたが、教職の父親が失職し退職金を叩いて購入した建売のチンケな和風の平屋で、西村伊作設計の瀟洒な洋館とは全く無縁であった。そのボロ家にこそ、私の屈折し鬱積した青春が封じ込められていた。それが既に更地になったと言った後で、電話の向こうの友が重ねて言う。

「更地になった昔の家の跡を観に来ないか」

「いいや観たくない!」

友は好意で言ったくれたに違いない。でも私は間髪入れずに友の問いにそう応えて何故が胸蓋がる思いがした。葬った積りの禍根が胸中を去来したからだ。知らなければ良かった!

電話を切つて直ぐに、私はGoogleの検索のキイを叩いていた。「文化村」に渋谷のBUNKAMURA等、無数に反応し各地の文化村が検索に引っかかる。「松本の文化村」で初めて見つけたのが前述の○○の文章という訳である。

時代は移ろい主代わり、景観も一変するは世の習いでその傾向は何も都会に限らない。界限を懐かしみ慈しみながらも建物は朽ち果てる。

青春時代を過ぎた文化村界限が更地や新しく建替えされる必然は、それなりの状況があったに違いない。そこに住んでいた誰かが、過去の西村伊作とのパイプを繋ぐ縁を重要と見なさない心境変化を生じさせたの違いない。そこに懐古の情を踏み付け新たな脅威を生じさせる。

「松本の文化村」という言葉が、やがて死語になるのを誰にも止められない。了